

poco a poco

パラグアイ便り 2024/10/01 Número20

2022年度 青年海外協力隊

氏名：吉田 花純

職種：小学校教育

【繋がりの中で生かされている】

日本で生活していてもパラグアイで生活していても、誰とも心の繋がりを持たずに生きていくことは、特に私の場合、絶対に無理だと常々思います。人と話したり人の話を聞いたりするなど、とにかく“おしゃべり”が大好きな私ですが、パラグアイで生活するようになってから更によく話すようになった気がします。それもそのはず、職場へ行けばパラグアイ人の同僚や児童と話し、帰宅してからも日本にいる友人やパラグアイ国内や他の国にいる友達とメッセージや電話のやり取りをすることができます。いろいろな大陸に友達がいることのメリットは、時差がある分、自分が起きてさえいれば常に誰かと繋がることのできるという点です。

パラグアイに到着して間もない頃は、今よりもずっとスペイン語を話すことができず、その悔しい気持ちを日本人の友人によく聞いてもらっていました。それが今ではかなりプライベートな話をスペイン語でボリビア人の語学の先生やパラグアイ人の家族や友人、同僚などにも話せるようになりました。もちろん人によって考え方は異なりますが、一定の国民性や信仰している宗教による共通した考え方があるということをよく感じます。同じ相談を日本人とパラグアイ人に行ってみると、正反対の意見が返ってくる場合があります。私のことを大切に想って導き出されたそのどちらの考えにも納得できる場合が多く、いろいろな考え方を勉強させてもらっているうちに、物事を幅広く捉えられるようになりました。選択肢が広がったことで、以前より気楽に生きられるようになりました。



【バラグアイの素敵なおとこ】

日本とバラグアイ、それぞれに素敵だと感じることがあります。今日はバラグアイの素敵だと感じることの1つを紹介します。それは“いつでも誰でも大歓迎。みんな友達。”といったオープンなおとこです。その“誰でも”の中には、私のような外国人も含まれます。主役とは面識のないパーティーに『一緒に行こう』と誘われたり、出会ったばかりの人の家で食事の招待されたりすることがよくあります。日本ではある程度の信頼関係ができてから自宅に招き入れることが多いと話したら、バラグアイ人は不思議がっていました。自分の家に招待して家族を紹介するなど自分をさらけ出すからこそ仲良くなれるのではないかと。なるほどと思いました。バラグアイで生まれ育った日系の友人から聞いた話です。日本で働いていたとき、日本人との距離感の取り方に苦労されたそうです。基本的に日本人は悩みを話したがりません。それどころか“どうしたの？”と聞かせないようなオーラを放っていると。どんなに小さなことだとしても友達が困っていたら力になりたいのに・・・と、寂しい思いをしたそうです。それを聞いた後、バラグアイの友人を思い浮かべてみたら、嬉しいことも嫌なこともみんな本当によく話します。あちらでもこちらでも『ちょっと聞いてよ！』と同じ話を何度も繰り返します。また大人も子どもも関係なく怒りの感情を激しく表したり号泣したり・・・“大人なら感情をコントロールするべき”という概念はなさそうです。これにはメリットもデメリットも感じている私ですが、自分の気持ちに正直であるという点ではとても素敵なおとこであると思います。また自分の弱さや悩みを相手に見せ、頼ることを通して相手に“信頼されている”と感じてもらい、自分を助けさせてあげることで相手に自信を与えているとも言えるのではないのでしょうか。バラグアイの人たちと一緒にいると“完璧でなくていい。むしろ完璧でない方がいい。”そのように思えます。

【ひとこと】

とても嬉しいことがありました。到着して間もないある隊員の方が私の企画した研修会に参加してくださり、こんなメッセージをくださいました。

“花純さんの思いがたくさん詰まった素敵なお研修会でした。カウンターパート（私の相棒であり一緒に研修会を企画し運営したバラグアイ人の同僚）と、更に研修会をより良いものにしようと熱く議論を重ねる姿に感動しました。上手くいかないことも多く落ち込んでいましたが次の隊員へと引き継いでいけるように頑張ります。”

このようなお褒めの言葉をいただけたことを大変嬉しく感じました。実は私自身も上手くいっていない時期に、先輩隊員の素晴らしい活動に参加させてもらったことで刺激をもらいました。尊敬する大好きな先輩隊員から引き継いだ知恵を無駄にすることなく、こうして次の世代へと引き継いでいることにほっと安心しました。またその出来事をすでに帰国されている先輩隊員にお伝えすると、とても喜んでいただきました。正の連鎖に莫大なエネルギーと可能性を感じます。

